令和６年度　校内研究計画

【研究主題】主体的に学び、共に伸びる自律した児童の育成

～「個別最適な学び」や「協働的な学び」をとり入れた授業づくりを通して～

１　研究主題設定の理由

本校の研究の経緯

本校は、平成２２年度からこれまで算数科の授業研究を柱として教育研究に取り組んできた。児童のつぶやきや対話、ノートの記述等の「見取り」と、それに対する「返し」を授業者の具体的な手立てとし、「問いを引き出し連続させる」「見方・考え方を働かせる」ことで課題解決に向かう児童の姿を目指し取り組んできた。令和３年度より、「『高知の授業の未来を創る』推進プロジェクト 実践協働校事業」の県指定を受け、算数科に加え、社会科(R3)・理科(R4)・音楽科(R5)の実践研究を行ってきた。これからの時代に求められる資質・能力を育成するため、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習指導の改善・充実を図るため、研究主題の副題を「問題発見・ 解決の過程の充実による汎用的な資質・能力の育成」と変更し、教科横断的な視点に立って研究の継続・発展を進めてきた。

昨年度の成果と課題

昨年度は① 確かな教材研究による子どものゴールイメージの明確化と単元デザイン、②自律的に学ぶ力の育成に向けた支援、③学力向上に向けて、の３点に重点をおいて取り組んできた。その結果、よりよい教材研究の方法について共通理解ができ、どの教科でも、授業者が子どものゴールイメージを明確にもつことはができるようになってきた。また ICT を授業の中で活用する実践も増えてきている。しかし、実際の授業の中での適切な「見取り・返し」の力が不十分であり、目指す姿に向かう授業の具現化に課題が見られる。ICT については、教師自身の活用能力にも課題があり、ICT の良さを最大限に授業の中で活用するという視点で、適切な使いどころを見極める力をさらに高めていきたい。また各種学力調査の結果から児童個々の状況や成長を見取る仕組みづくりを少しずつ進めているが、PPDAC サイクルを回す仕組みに課題があるので、計画したことを確実に実施していけるようにしたい。

児童の実態

昨年度の授業アンケート「最後まであきらめずに学習に取り組むことができていますか。」は、肯定的評価 91%、魅力ある学校づくりアンケート「授業に主体的に取り組んでいますか」は肯定的評価 93.6%という結果になった。授業に困り感が強い児童が多い中、難しい課題であっても友達と関わりながら、最後まで粘り強く頑張るという学習の素地がどの学年も育ってきていると考える。「考えをもつために、学び方を自分で決めることができましたか。」は 85%で、個人・ペア・班など、課題解決に向けて誰と学ぶか決めることができるようになってきた。教師が校内研などを通して、自律的に学ぶ力を育てるという意識を高め、授業実践してきた成果と考えられる。　「友達と学習しながら、もっとよい考え方や説明の仕方を見付けることができましたか」は 87%で、協働して学ぶことでより良い学びを実感している児童が多くなってきている。しかし、「学習したことが、今までの学習のどんなことにつながっているかを見つけようとしていますか。」は 81%で、他の項目に比べ１番肯定的評価が低く、既習とのつながりの視点が弱いことが分かる。個々の学びを自分の言葉で整理し、既習の知識と関連付けながら、意味理解を伴う知識へと高めようとすることや、学習を振り返ることには弱さが見られる。

各種学力調査の結果からも、国語科は全学年で知識・技能が、算数科でも 4,6 年生以外は知識・技能が全国あるいは県平均を下回っている。しかし、記述式の無回答率は低くなってきており、問題に対して粘り強く取り組む姿勢が育ってきていると考えられる。

研究の方向性

以上の成果と課題を踏まえ、今年度は「主体的に学び、共に伸びる自律した児童の育成」のために、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を取り入れた授業改善を目指していく。

そのために、研究教科を複数教科にし、教科部会を新設することで、より系統を意識した教材研究、効果的なICT活用方法の模索を充実させていきたい。どの教科においても児童自らが問いをつかみ、各教科の「見方・考え方」を働かせながら課題解決をしていく中で、個別最適・協働的な学びをどう実現していけば「主体的で深い学び」につながるのかを検討し、実践していく。児童一人一人が知識・技能を習得・活用し、探究していく単元構成にすることで、生きて働く知識や技能の習熟につながっていくだろう。

2　研究仮説

指導者が、様々な教育活動において、「個別最適な学び」や「協働的な学び」を取り入れることで、児童一人ひとりがより主体的に学習に取り組み、他者と協働することでさらに学びが深まるだろう。そのためには、まず教員のICTの活用能力を高め、授業や家庭学習などで積極的に活用し、「主体的で深い学び」のためのICTのより有効な活用方法を模索していく。また、単元や本時のゴールの姿を明確にし、学習計画や活動の意義を共有することで、学びを自ら進める、自律した学習者に近づいていくことが期待される。その土台としては、何よりも子どもの実態や状態を的確に「見取り」、適切で効果的な「返し」や手立てを計画し、実践していくことが必要になってくるだろう。

3　本年度の研究について

（１）研究内容

① ICTの有効な活用を通して、考えをもち、広げ、深める授業づくり

・教科部会でのICTの実践交流を通して、教員のICT活用能力を高め、授業での活用頻度を高める。

・孤立した学びにならないように、友達や教師など他者との関わりを通して、考えを広げたり深めたりする（＝協働的な学び）手立てを考える。

② 学びの見通しと振り返りを大切にした授業づくり

・確かな教材研究によってその単元のゴール（身につけたい資質・能力、見方・考え方）を明確化し、どんなことができるようになったら良いかという具体的な児童の姿を想定する。

・児童が自ら問いをもてるように教材提示や発問を工夫し、解決の見通しをもたせ、単元のねらいや学習計画などを共有する。また、各学習活動において「なぜこの　活動をするのか」という意義を児童と共有することで、学びの見通しが持てるようにする。

・単元や本時のねらいに対して振り返ることで、学びのメタ認知をし、その振り返りを教師が価値づけたり活用したりすることで、自己調整能力の育成や主体的で深い学びにつながるようにする。

③ 学力調査の結果分析による学力向上の取り組みの実施

・学力調査の結果から課題を分析し、それに対する取り組みを計画、実施していく。

④通常の学級における合理的配慮の実践

・特別な教育的支援を必要とする児童の実態を的確に把握し、集団における授業の工夫や合理的配慮の実践や、管理職、特支コーディネーター、特支担任、通級指導担当教員と通常級担任との連携、協働による校内支援体制の充実を図る。

（２）結果の検証方法

①ICT の有効な活用を通して、考えをもち、広げ、深める授業づくりの検証

・各種児童質問調査において以下の達成目標を設定し、変容を検証する。

ア：本校作成の「授業アンケート」の結果において、肯定的評価の割合の向上（６月→１１月）

イ：全国学力・学習状況調査、各種アンケート調査において、教職員・児童とも「一人一人に配置された PC・タブレットなどの ICT 機器を、授業で週 3 回以上活用する。」１００％）

・研究授業での成果と課題を生かして検証授業を実施し、「見取り・返し」を改善するとともに、児童の様子がどのように変わったかその効果を検証する。（授業レポート作成）

② 学びの見通しと振り返りを大切にした授業づくりの検証

・研究授業での成果と課題を生かして検証授業を実施し、「見取り・返し」を改善するとともに、児童の様子がどのように変わったかその効果を検証する。（授業レポート作成）

・児童の振り返りの記述から、自己調整能力の育成や主体的で深い学びにつながっている姿が見られるか検証する。

③学力調査の結果分析による学力向上の取り組みの検証

・全国学力・学習状況調査、高知県学力定着状況調査、標準学力調査において、各教科：平均正答率全国比以上、平均正答率全国比差 4 月→12 月にどれだけ向上したかをもとに各種の取組実施によって結果的に学力がどのように変容したのかを検証する。

④通常の学級における合理的配慮の実践の検証

・研修アンケートの肯定的評価、記述内容から、普段の教育活動の中で、どれくらい意識できたか、実践したかを検証する。

・実践記録を作成し、校内で共有する

4　研究の全体構想

学校教育目標　「未来を拓く自己を育てる大篠小学校」
めざす児童像　自分で決める子　他者とつながる子　変化を楽しむ子
知・徳・体のバランスのとれた児童の育成

研　究　主　題
主体的に学び、共に伸びる自律した児童の育成
～「個別最適な学び」と「協働的な学び」をとり入れた授業づくりを通して

児童の実態
○主体的に学習に取り組もうとする児童が多い。
○知識・技能が全国や県平均以下だが、記述式無回答は低く、粘り強く取り組める児童が多い。
○既習の知識と関連付けながら、意味理解を伴う知識へと高めようとすることには弱さが見られる。
○特別な支援を必要とする児童が増加している。

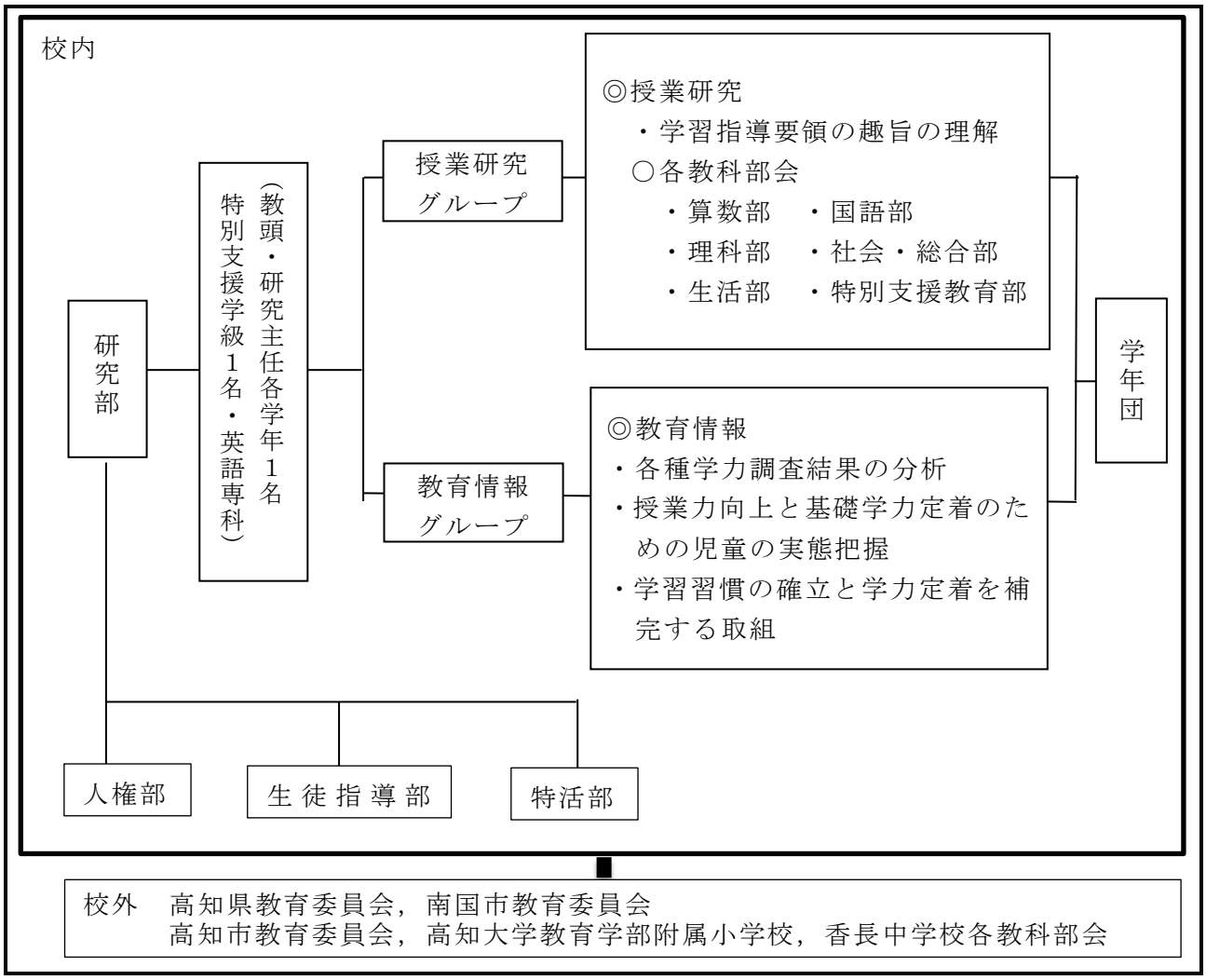
本年度の重点
○ICT の有効な活用を通して、考えをもち、広げ、深める授業づくり
○学びの見通しと振り返りを大切にした授業づくり
○学力調査の結果分析による学力向上の取り組みの実施
「個別最適な学び」と「協働的な学び」をとり入れた授業づくり

研究の成果として期待したいこと
①クラウド共有できる教材の蓄積
②ICT を効果的に活用した授業の実践の蓄積
③日常から授業改善について話し合う風土の醸成
④児童の学習意欲が高まり各種学力調査の結果の向上。

研究仮説
指導者が、様々な教育活動において、「個別最適な学び」や「協働的な学び」を取り入れることで、児童一人ひとりがより主体的に学習に取り組み、他者と協働することでさらに学びが深まるだろう。そのためには、まず教員の ICT の活用能力を高め、授業や家庭学習などで積極的に活用し、「主体的で深い学び」のための ICT のより有効な活用方法を模索していく。また、単元や本時のゴールの姿を明確にし、学習計画や活動の意義を共有することで、学びを自ら進める、自律した学習者に近づいていくだろう。その土台としては、何よりも子どもの実態や状態を的確に「見取り」、適切で効果的な「返し」や手立てを計画し、実践していくことが必要になってくるだろう。

○言語環境の構築・整備
○学習習慣の確立(学習 10 か条)
○学力定着を補完する取組
○発達支持的生徒指導の充実

5　研究体制



6　研究計画

実施時期	取組の計画 ○授業研究　●分析・検証　◇その他	期待される結果
４月	◇研究の内容・方向性の共有 （学習 10 か条、基礎学力定着・学習習慣の取り組み等） →児童の素朴な概念を、対話的な学びを通してより洗練されたものへと高める →「授業振り返り」を活用して、働かせた「見方・考え方」や身についた資質・能力を自覚する。 ◇教科部会①（計画の共有）	○学習指導要領の趣旨の理解、、目指す授業イメージの共有を通して、授業の質の向上を目指した組織的な授業改善につながる校内の体制を再構築する。 ○学習環境を整え、児童に必要な学習スキルが定着し、児童と授業イメージを共有できる。
５月	●全国学力・学習状況調査事項採点結果、及び、標準学力調査の結果分析 ●授業アンケートの実施・分析 ○第１回全校研※泰山准教授 （事前研・教材研究→授業公開・事後協議） ○第２回全校研※齋藤専門官　師範授業 ◇教科部会②（指導案検討）	○各種学力調査・学力向上のための取組における結果を分析し、児童個々の課題解決への指導の充実が図られる。 【教科部会を通して】 ○クラウド共有できる教材が蓄積され

６月 ７月 ８月 ９月 10 月 11 月 12 月 １月 ２月 ３月	○ブロック研Ⅰ【複数教科】 （本時①本時②：授業公開・事後協議） ◇教科部会③(実践の共有) ●１学期の反省と改善点の確認 ◇１学期の総括･取り組みの反省･改善計画 ○研究発表会に向けた授業研究 （教科部会④ 教材研究・指導案検討・模擬授業） ◇２学期の取組方針・日程の確認 ◇教科部会⑤（指導案検討） ○齋藤専門官　通覧指導（複数教科） ○ブロック研Ⅱ【複数教科】 （事前研・教材研究→授業公開・事後協議） ○第３回全校研【生活・総合】 ●授業アンケートの実施・分析 ◇教科部会⑥(実践の共有) ●高知県学力定着状況調査・標準学力調査の結果分析 ●２学期の反省と改善点の確認 ◇３学期の取組方針・日程の確認 ◇教科部会⑦(指導案検討) ○研究発表会の模擬授業 ○研究発表会【算・国・理・社・総・生】 ※泰山准教授 （事前研・教材研究→授業公開・事後協議） ●高知県学力定着状況調査・標準学力調査結果分析・取り組み共有 ◇教科部会⑧(実践の共有) ●総括と次年度に向けての確認 ◇研究成果の公開 ◇教科部会⑨(総括)	る。 ○ICT を効果的に活用した授業の実践ができる。 ○日常から授業改善について話し合う風土が醸成される。